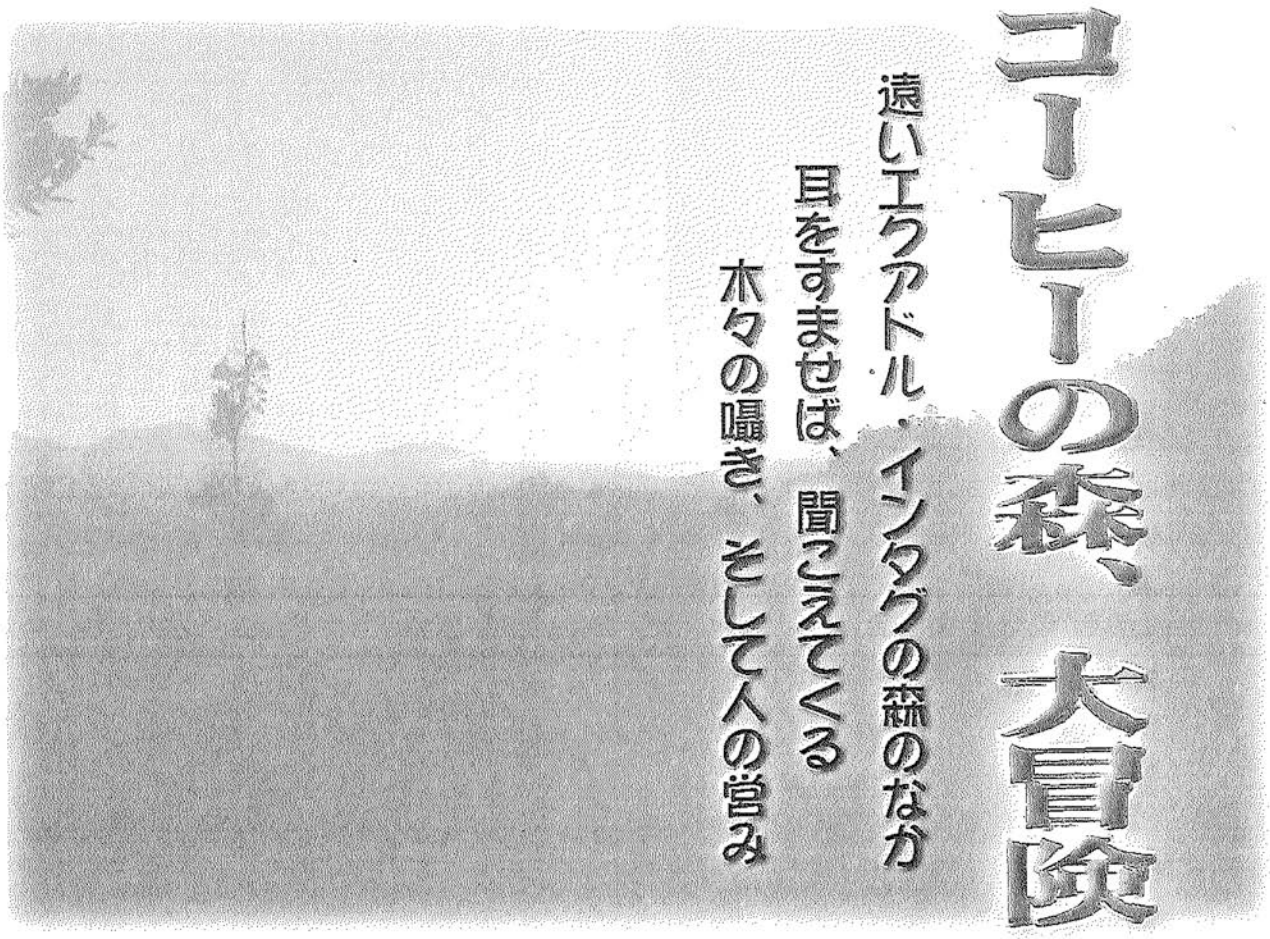
インタグコーヒー物語



インタグの森の静かな朝

文　/藤岡　亜美

2002年明治学院大学卒業。
卒論執筆のためエクアドル、インタグ地区のフニン村での三ヶ月間のフィールドワークを行う。
現在（株）ウインドファームスタッフとして、ウインドファーム東京支社（カフェスロー内）で活躍中

南米、エクアドル。日本から見れば地球の反対側、赤道直下に位置するこの国の山奥に、フニンという小さな村がある。人口は三〇〇人。フニンとチャルグワヤクという二つの透明な川に挟まれて、人々は自給自足の毎日を送る。

村のはずれ、チャルグワヤク川の近くにのこる森は、最初に入植した人の名字をとり「アルヘンチーナ」とよばれている。人々が目をさます頃、森には重たい霧が立ちこめている。ラン、ブロメリアなど着生植物の明るい色合いが、木々の高い場所を彩る。それらは空気中の目に見えないような水分と養分を受け取って、どっしりと重くなるまで育つ。やがて重みに絶えきれなくなった木々は倒れる。重なりあう緑の暗闇を、押し退けながら倒れる。こうしてできた隙間に、再び太陽の光が差し込む。そこからまた、新しい命がうまれて、命の周りには霧が立ちこめ、循環は繰りかえされる。

木漏れ日で育つコーヒーの森を、黄色いサンバイザーをかぶり、大きな鉈を片手にさっそうと歩く青年がいる。

エドモンド・ルセロ。コーヒーの森で働くのが大好きな二十

六歳。美しい森のつくる影と、落葉の重なりあった足元。そんな環境のなかだから、気持ちよく仕事ができると微笑む。

彼と森に出かける朝、かまどではお母さんが御飯を炊いている。セメントの厚い壁の家。かまどの熱が直に伝わるので、台所の外壁は温かい。その温かい壁には、お父さんが寄り掛かっている。エドモンドの両親は四〇年程前、コロンビアから入植した。人口の増加によって都市での生活が苦しくなり作物を植える土地を求めて多くの人々が移住をはじめたちょうどその頃だ。未開のこの地を開拓した夫妻は、サトウキビ農園をつくった。家の裏手にある工場で無農薬栽培のサトウキビを蒸留し、「アグワルデンテ」と呼ばれる酒を作っている。

御飯とジャガイモとユカイモ、そして目玉焼きをいれた鍋をカバンに詰め込む。水筒にはライムと黒砂糖、そして川の水。森をくねくねと歩く途中でそれらがちょうど良い具合に混ざってゆく。ひと休みする頃には上等なレモネードができあがるはずだ。

森へと入る横道を一〇メートルも進めば、景色も音も別世界。踏み付けた落葉がカサカサという音、木の実の落下、風や太陽や他の全ての命が、いつもよりずっと近くに感じられる。インカの古墳が点在する森を抜け辿り着いたのは、丘の頂上にぴったりの小さな木造の家。壊れかけている。床下の木枠だけになったその中に入っては、「ここは台所」「ここはかまどの跡」と説明するエドモンド。

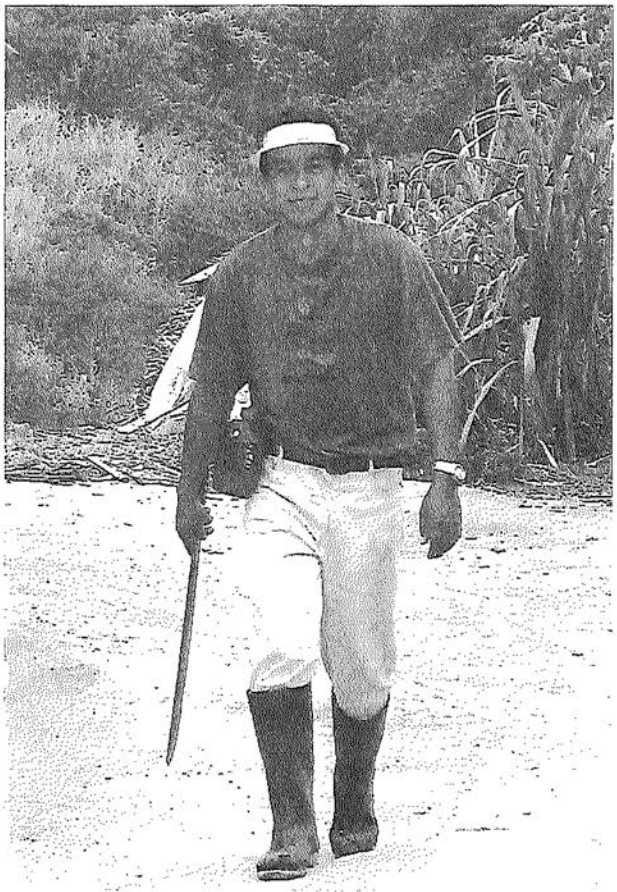
「ここはまだ小さかった僕らのベッドがあった場所」。私たちは、そこから丘の下を見下ろした。

アルヘンチーナの他にも深い森がのこっていた頃、狼が家の近くまで現れることが度々あった。丘のてっぺんにある小さな木の家まで、低く吠える声が届くと、兄弟みんなで一枚の毛布をかぶりおびえた。お父さんがひとりで家を出て、銃を一発放ち、狼をしとめた。鉈一本をもって新しい土地に入る入植者にとって、生きることは森を切り開くこと、住むことは自然を支配することだった。新たに人が移住し、家族をつくり、幸せの数が増えるに連れて、この辺りの原生林はひとつ、またひとつと姿を消した。丘に自生した木の果物、ウァナバナ・デル・モンテを食べながら、エドモンドは話を続ける。白くてフカフカした甘い実が、現実の世界ではないような気分にさせた。食べごろのもう一つをもぎ取り、リュックのポケットにしまった。

コーヒーの栽培が本格的に始まったのは、この村が鉱山開発の問題に直面したあとのこと。一九九二年から日系企業とエクアドルの政府が手を組んで、フニン川の上流に露天掘り鉱山を掘ることを計画していた。実行されれば、森も村もなくなってしまうような計画だというのに、住民達には何も知らされていなかった。あるとき、試掘によって流れ出た鉱物が川を汚染し、泳いだ子供が皮膚病にかかり、水を飲んだ動物が死んだ。悩んだ末に村びとは、話し合いに応じない開発側を追い出した。キャンプに人がいない時を見計らい、道具を一時運び出した上で、火をつけたのだ。

この地方の森は、地球上で危機にさらされている10大「ホットスポット」のひとつ。保全が強く求められている。インターネットによって、その森に起きた事実が世界中を駆け巡り、開発は阻止された。

村びとたちは何が一番大事かを考えた。大きな会社組織や政府に反対することに関して、恐いとは感じなかった。相手がどんなに大きな力だろうと、命は守られなければならない。そう信じた。経



エドモンド・ルセロ、森のなかで

済の発展より、生態系に寄り添って生きていくほうがずっといい。そう確認した。生きていくのに必要なものは全てここにある、無駄なものがないだけだ。大切なことは、村にとって何が重要かということについての相互理解が皆のあいだにあることだった。そこで、鉱山の変わりに森にコーヒーを植えようと決めた。開発を押し付ける先進国の人たちに、ツアーで森を見せることにもした。村はゆっくりと、その答えを生き始めた。

ところがその頃、エドモンドの家ではサトウキビ畑をどんどん広げていた。家の近くには、ライムの木を植えた。アグワルデンテは良く売れるようになり、自給自足の村の中ではすぐにお金持ちになれた。やがて工場と農園の近くに新しい家を建て始めた。あんなに大きな家はこの辺りでは一つだけ。丘から見下ろすサトウキビ畑のちょうど真ん中に、大きな白いコンクリートの固まりが見える。二人の息子も大きく育ち、雇われの労働者と肩を並べて働けるようになった。父ビルヒリオは畑を広げるために、森をさらに切り開こうと考えた。しかし、大人になった息子たちは反対した。兄のホルヘとエドモンドは、森を切る変わりに、残した森にコーヒーを植えることを提案したのだ。

そして三年ほど前、森の中に苗を植えはじめた。もうすぐ収穫が可能になるそのコーヒーは無農薬有機栽培。背丈の違う樹木、果物や野菜を混植して栽培するという伝統的な多品目栽培により育てられる。開墾した畑より自然の状態に近いために収穫量が少なく、収穫の作業にも手間がかかる。しかし品質は最高。日陰樹が根を深くはり水分が常に供給されることで土壌の保全にも役立っている。この「アグロフォレストリー」という農法によって運営されるコーヒー園は、それ自体が生物多様性を持ったエコ・システムになっているのだ。

三人の大工さんが、村に隣接した二次林の中に、竹と木材のキャビンを建築した。主婦が料理の勉強をしている。エドモンドもプロジェクトに参加。町に出てガイドの資格をとった。おとずれる旅行者のために、原生林をとおり鉱山にいたる道を作る。作るといっても人が通りやすいよう、鉈で張り出した枝を切り開くだけの作業だ。「何もしなくても既に森は綺麗だからね。」その森をとおってのぼるのは、鉱山試掘の現場からほど近い、聖なる滝。「お願いがあるんだ。この滝の写真を撮っておいて。」水筒に源流の水を汲みながら、エドモンドが私に言う。水源、薬草、伝統技術……村の人びとは、観光客へのツアーによって、自らの暮らしを成り立たせているものごとを、ひとつひとつ発見し直している。

道がなかったころ、キャビンの建っている森をぬけて小学校に通っていた。そこには、マタパロ（気根）や木の実、おもしろい虫など遊び道具になるものがあふれていた。友達と夢中になって遊ぶので、お昼に学校が終わっても、家に帰り着くのは毎日四時を過ぎていた。子供達は森に居るとき、時間がたつのを忘れていた。その気持ちはすぐに分かった。ちょうどわたしが今、エドモンドの森の話を、夢中で聞いているような感じだろう。アルヘンチーナの奥まった所に、背がひょろりと高く沢山の実を貯えたコーヒーの樹がある。小学生の頃、兄と二人で森を駆け回っていたときだ。コーヒーの赤い実をしゃぶり、プッとはいたその種は、気づかぬうちに森に芽をだした。森での不思議な時間が、一番高いコーヒーの樹として、こうしてツアーの通り道に残っている。私も赤い実をしゃぶりながら、まだ小さい彼と、もっと豊かだった周辺の森を想像した。この樹がここに育ったことが偶然だとは、とても思えない。

現在、小学校までは車の入れるようトラクターで切り開いた道ができている。子どもたちは森ではなく、その道や広場であそぶようになった。森について知らない子が増えている。エドモンドは小さい頃によく遊んだから森について知っている。だからガイドの仕事をしたいと思うようになったし、それができるのだという。森は命の源であり、心の故里。鉱山開発による危機をきっかけに、コーヒーの森で働くことになったひとりの青年が、小さい頃からの森への思いを内面化させている、その思いがこれから先も森を守って行く。

エドモンドと森で過ごすことは、私にとって特別の意味を持っていた。原生林を抜け、空になった水筒にフニン川の水を汲み、鉱石を取って戻る。物音から、鳥や小動物を見つけては合図をくれた。息をひそめてみた鳥の鮮やかさは息を飲むほど。遠くの山に焼き畑を見つけると愚痴も言い合った。鉱山へ続く保護林の近くがひどく焼かれていて、無言で歩い

たときもあった。一緒に森にいると、彼がどんなに森が好きなのかがいつも伝わってきた。

ひとびとは日の当たる農地を求め、焼き畑の習慣をなかなか止めない。許せないことではあるが、彼らの気持ちも分かるという。土地への負荷が大きい焼き畑を続ければ、息子たちの世代はそこで作物を育てられなくなる。そう知ったお父さんも近年になって、焼き畑をやめた。隠れて行なう人々がたえないことに頭を抱えるエドモンド。それでも、どうにか有機コーヒー栽培やツーリズムが成り立つというモデルを示し、森を守れることを村の人々に伝えたいという。そしていつか自分の家の森にもキャビンを持ち、父の無農薬栽培のアグワルデンテ工場へも、旅行者を案内したい。森を切るときには反対していても、この地に家族の暮らしを築いた父、やはり誇りにおもっているのだ。

工場を手伝い、森の仕事もした一日の終わり、エドモンドの部屋からは、たて笛の音が聞こえてくる。ガイド学校の先住民の友達に影響されて始めたサンポーニャ。旅行者に聞かせてあげる日のために寝る前の練習を欠かさない。サトウキビ畑に響く、まだへたくそなその音色を聞きながら思った。「今日歩いたアルヘンチーナの森を、絶対に忘れたくない。」

優しい光に照らされたコーヒーの木々は、すくすくと育っている。フニンを出る頃はちょうど雨期の始まりで、白い花が甘い香りを漂わせ虫を集めていた。今年も同じように花がさき、実を着け、彼らがその森に向き合い働き、コーヒーはできる。

東京のあるカフェで頼むいつものカプチーノ。ジャズを聞きながら読むニュース。経済面には「コーヒー価格暴落」の話題。だからといって、一杯三五〇円の値段が変わることはない。それが、私たちの選んでいる「一杯のコーヒー」というつながりかた。ある本の一節が、帰国後私の頭の中にぐるぐるとまわっている。「私たちは豊かでかれらは貧しく、だから豊かな私たちがかれらに思いを及ぼすべきだというのではない。作るものと使うものが、たがいに相手への理解を視野にいれて、自分の立場を構築しないと、貧しさと豊かさのちがいは、言いかえれば、彼らの孤立と私たちの自己満足の距離は、この断絶を利用している経済の仕組みを温存するだけに終わるだろう。」（鶴見良行「バナナと日本人」）

一九九九年、WTOがすすめる自由貿易が環境破壊や貧困をますます助長するものだとして、シアトルでとうとうストライキが起きた。暮らしを支えるモノの全てが否定に満ちてはいない社会。搾取でも破壊でもなく、援助でもない貿易。人と人が、人と自然がそれぞれのペースを保てる関係。エドモンド達と私たちはそれを作れるはずだ。全てを否定するのではなく、かといって諦めるのではなく、自分とその周りから変えてゆくこと。

今日も一番好きな場所で、気持ちよく働くエドモンド。彼をみならい、私も自分の住む場所から、一杯のコーヒーから伝えて行きたい。地球の反対側に居ても、同じ森を想像できる。あの一番高いコーヒーの樹を、ナマケモノの棲む豊かな森を、想像できるってことを。

コーヒー豆を煎るエドモンドのお母さん